

KIITO:

目が

体なのか



言ひ

いらん?

	KIITO アーティスト・イン・レジデンス 2013 濱口 竜介 自分が誰なのか言ってごらん？
--	--

「KIITO アーティスト・イン・レジデンス2013」では、映画監督の濱口竜介を滞在アーティストに選んだ。本プログラムは、アーティストがKIITOを拠点に、神戸のまちや周囲の人々と交流を重ねながら滞在制作を行なうことを目的にしたもので、もしかすると映画という表現ジャンルはこれにかなり適しているのではないかという期待はあったものの、映画監督を滞在アーティストに迎えるのははじめての試みであり、KIITOにとってはひとつの冒険でもあった。

濱口竜介を知ったのは2011年のことだ。映画製作機関サイレントヴォイスLLPのプロデューサー、相澤久美から、どうしても観て欲しいものがあると言われ、ある映画を観た。それが、濱口が酒井耕と共同で監督した『なみのおと』という映画だった。

それは何とも不思議な感覚に満ちていた。東日本大震災で被災した方々の記録ではあるのだが、そこに被災の風景はほとんど現れず、ただひたすら、ごく親しい人たちの対話が続くだけだ。夫婦や姉妹、仕事の同僚といった人々が、「あの日」について語り合う。決してインタビューではなく、あくまで対話なのだ。しかもその対話は少々変わっていて、ときどき話者が観客の真正面を向いて語りはじめる。

これは実際の対話を写した映像としては極めて不自然なことだろう。つまりカメラは語る2人のまん中に位置するわけで、それにしては語る人々の表情はあまりにも自然で、打ち解け、親密さに変化はない。まるでカメラが消えてしまったような状況が生まれているのだ。

この映画を観る第三者、つまり観客にとっては、カメラとは、すなわち自分の眼である。映画を観る私たちの視線と言ってもよい。だからこの瞬間、私たちは透明になってしまう。空気のように消えてしまう。彼らはまるで私などそこに「いない」かのように語り続ける。あるいは、彼らの親密な関係に私を迎え入れてくれたように錯覚する。

私自身は、昔から知っているとても親しい人たちの会話に同席しているような錯覚に陥った。いや、ここまで親しく、自分の内面を私に語ってくれる見知らぬ他者に、強烈な親密さを感じたというべきか……。とにかく

く映画を見終わった時点で、私はこの映画に登場した総ての人たちを、たしかに知っている、いや、極めて良く知っていると感じていた。

その効果は抜群で、テレビのインタビューを通して聞く彼らの話や、著名人のコメントなどとは比較にならぬほど、私は被災の現実を「自分事」として受け入れていた。他人事などではなく、ごく親しい身近な人の体験として、私も「被災」の時間を生きたような気がしていたのだ。友人たちとくだらだと語り合う喫茶店の時間のように、2時間という上映時間もまったく苦にならなかった。

その後、両監督が編み出したZ形式という特異なカメラポジションを知った。つまり対話者は対角線上で対面し、それぞれの話者の正面にはそれぞれの話者を写すカメラが配置される。これは偉大な発明と言ってもいいだろう。Z形式の撮影により、ノンフィクションであるにも関わらずフィクション的な空気が流れ込み、フィクションとノンフィクションの間の曖昧な領域さえ、ここには生まれてくる。しかも不思議なことに、フィクションの空気がかすかに漂うからこそ、この場は余計リアルなものになっていくのだ。私にはそれがたまたま魅力的に、またスリリングに思えた。

後にこの作品は、続編である『なみのこえ』、口承の民話語りの記録である『うたうひと』とともに、酒井、濱口両監督の東北記録映画三部作を構成することになる。ここに『うたうひと』が入っているのは極めて象徴的で、実は両監督の意識が語ることと聞くことの相補性、さらに言えば相互生成に向けられていることを如実に物語っている。当たり前の話だが、聞く人がいてこそ語る人が生まれ、語る人がいてこそ聞く人が生まれる。そのダイナミックな相互作用に、ふたりは夢中になっていったのだろう。

濱口はKIITOで「濱口竜介 即興演技ワークショップ in 神戸」という長期のプログラムを展開した。詳しい内容は本冊子のドキュメントを参照いただきたいが、ここでの主題は「聞く」ということだった。濱口がなぜこのような構想に行き着いたのか、それはもう説明は不要だろう。2011年の東北から続く彼の旅の、ひ

とつの自然な展開であったと私は思う。

2014年2月15日、濱口とワークショップ参加者は、「自分が誰なのか言ってごらん?」というタイトルで、ワークショップの成果を発表したが、これは驚くべきものだった。すでに『BRIDES (仮)』という将来撮られるはずの映画シナリオができていたが、一室ではその映画に登場するキャラクターたち、正確に言えばそのキャラクターを演じるワークショップ参加者の対話が撮影され、上映されていた。そしてもう一室ではシナリオの「公開本読み」、つまりワークショップ参加者が台本の、それぞれが演じるキャラクターのパートを読み合わせするのである。

今回のワークショップ参加者は一般に公募され選ばれた方々で、演技経験などない方も多く含まれている。そうした「普通」の人たちが、なんでここまでいきいきと他者を生きられるのか、私は深い感動を覚えてしまった。濱口が行ったワークショップは「聞く」ことのワークショップであり、いわゆる演技指導などというものは行われていなかったからだ。

聞くことが語ることの基礎となり、さらには演技や表現さえ花開かせる。濱口は今回、自らの仮説の実証実験を行ったのだろう。そしてそれは、奇跡的なまでに成功したと思う。

濱口は東北で実感した聞くことの可能性を、Z形式で撮影するノンフィクションからさらに進め、「演技」やフィクションの領域にまで展開しようとした。彼らは今後、このワークショップ成果をもとに一本の映画を撮るという。東北で生まれた種がKIITOの土壌で芽吹き、育ち、花を咲かせていく。

私たちはいま、それを見守ろうとしている。

成果発表

「自分が誰なのか言ってごらん？」

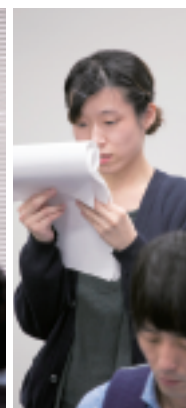
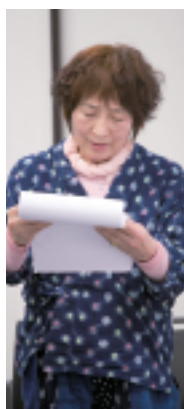
2013年9月より約5ヶ月間に渡り、
「濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe」を行なった。
ワークショップ終了後、
有志による長編映画製作に入る予定(2014年4月～)。
映画撮影前の最終段階として、2014年2月15日に
成果発表「自分が誰なのか言ってごらん？」を開催した。
映画用シナリオ『BRIDES(仮)』の「公開本読み」および
「キャラクター・インタビュー」の映像を公開することにより、
今後製作する映画を「テキスト」と「演者」の
2つの側面から予告した。



『BRIDES (仮)』公開本読み

ワークショップの参加者により、
シナリオ『BRIDES (仮)』の本読みを全編通しで行なった。





あらすじ

あかり、美美、桜子、純の4人は、カフェ「ニノチカ」に通ううちに親しくなり、今ではなんでも話し合える友達同士である。4人は定期的にニノチカに集まっては飽きることなくおしゃべりに興じている。

ある日、桜子は純から一本の電話を受けとる。純は現在夫の公平と離婚を巡って係争中であり、もう1年以上裁判を続けているというのだ。裁判の原因は純の浮気である。恋人との未来を夢見て離婚を望む純だが、公平は純を愛していて、離婚する気はないという。純の突然の告白は3人の間に伝わり波紋を呼ぶ。離婚裁判の事実以上に、1年以上離婚について打ち明けられなかったことに対して、あかり、芙美、桜子はそれぞれ動揺する。

そんな中、4人は二ノチカで開かれる夜のイベントに参加する。久しぶりに集まった4人の関係はなんとなくギクシャクしている。イベント中に知り合いになった鵜飼とその仲間たちが4人のテーブルにやってくる。鵜飼たちの中で風間に離婚裁判の経験があることから「離婚」についての話題となるが、純は耐えきれず1人で帰ってしまう。純が帰った後も話は続き、鵜飼が話の中心となっていく。鵜飼はあかり、芙美、桜子の3人が普段押さえつけている欲望や衝動の存在を指摘する。そして、それが純の行為によって激しく刺激されていることも。鵜飼は告げる。「欲しいものを欲しいって言ったらいいよ」。あかりや桜子が鵜飼のペースに飲み込まれるのを横目で見ていた芙美は、会を終わらせる。

純の離婚裁判の判決当日、あかり、桜子、芙美は傍聴に行く。判決は純の離婚請求の棄却だった。控訴しても勝ち目はない。あかり、桜子、芙美は裁判を終えた純と話そうとニノチカで待つが、純が訪れないまま夜を迎える。3人が家に帰れないまま夜を過ごしていると、鵜飼が現れる。あかりは欲望を刺激され、鵜飼と共にニノチカを出て行く。桜子はまた偶然出会った風間と共に街の中に消えていく。1人残った芙美は家に帰るが、芙美の帰りを待っていた夫の拓也に別れを切り出される。芙美が何も言えないまま、夫は出て行ってしまう。

純は、自殺を図る。破綻した結婚生活を法律上証明する為の「自殺未遂」だ。病院に運ばれる純。駆けつけた美美は純の容態を気にしている。純の容態の急変が告げられるが、美美は動けない。その場を離れ、電話を取り出し、夫に電話をかける。美美は留守電に吹き込む。「私、あなたと別れたくない。あなたを愛してるの」

席次表

⑬ 富田 仁 (高橋知由)	⑦ 日野公平 (謝花喜天)	⑪ 玉田淑恵 (久貝亜美)	⑩ 鶴飼日向子 (出村弘美)	⑧ 鶴飼 景 (柴田修兵)	⑨ 風間雄大 (坂庄 基)	⑬ 滝野葉子 (殿井 歩)	⑤ 井場良彦 (申 芳夫)	⑭ 井場みつ (福永祥子)
④ 日野 純 (川村りら)	⑮ 河野智則 (伊藤勇一郎)	⑥ 塚本拓也 (三浦博之)	③ 塚本美美 (三原麻衣子)	① 槇野あかり (田中幸恵)	⑬ 柚木香織 (渋谷采郁)	⑫ 栗田耕史 (田辺泰信)	② 井場桜子 (菊池葉月)	

人物紹介

- ① 槇野あかり(37) … 看護師。現在、独身。
- ② 井場桜子(37) … 専業主婦。良彦の妻。
- ③ 塚本美美(37) … 広告デザイン会社勤務。拓也の妻。
- ④ 日野 純(37) … 主婦。現在、離婚係争中。
- ⑤ 井場良彦(37) … 県庁職員。桜子の夫。
- ⑥ 塚本拓也(33) … フリーの出版編集者。美美的夫。
- ⑦ 日野公平(40) … 生命物理学研究者。純の夫。
- ⑧ 鶴飼 景(30) … フリーター。カフェ「ニノチカ」常連客。
- ⑨ 風間雄大(27) … 信用金庫勤務。鶴飼景のバイト先の元後輩。
- ⑩ 鶴飼日向子(29) … ホテル勤務。フロント担当。景の妹。
- ⑪ 玉田淑恵(28) … ホテル勤務。鶴飼日向子の同僚。
- ⑫ 栗田耕史(40) … 槇野あかりの病院に務める医師。
- ⑬ 柚木香織(23) … 槇野あかりの後輩看護師。
- ⑭ 井場みつ(70) … 良彦の母。桜子の姑。
- ⑮ 河野智則(25) … 広告デザイン会社勤務。塚本美美的後輩。
- ⑯ 富田 仁(28) … 料理学校講師。日野純の年下の恋人。
- ⑰ 滝野葉子(28) … カフェ「ニノチカ」店長代理。
- ⑱ 女(25) … ホームで塚本拓也と一緒にいる女。小説家。



「キャラクターインタビュー」映像展示

ワークショップの参加者により、
シナリオ『BRIDES (仮)』の役柄を演じながら
即興的にインタビューを行なった際の記録映像を展示した。



槇野あかり × 塚本美美 ※9つの映像作品のうち1つの会話内容の書き起こし。

芙 美：あなたは誰ですか？

あかり：槇野あかりです。37歳です。
看護師をやっています

× × ×

あかり：あなたは誰ですか？

芙 美：私は塚本美美です。年齢は
37歳です。職業は、小さな広告会社
で10年ほど働いておりまして。デザ
イン制作部というところにいます
(互いを見て笑い合う)

× × ×

芙 美：お仕事は、普段どう？

あかり：(笑いながら) 普段？ 仕事は、
うーんと、大変ちゃあ大変

芙 美：大変

あかり：うん

芙 美：どんなこと(咳払い)

あかり：体力的にすごい大変

芙 美：大変(頷く)。どのくらいにな
るんだっけ？ 勤めて

あかり：勤めて、まあ看護師になって
15年

芙 美：15年

あかり：でもいつまで出来るんかなっ
てすごい思う

芙 美：あー！ 思う。この先ずっと

あかり：うんうん

芙 美：そうねでも、いつまでやる
かっていう話だと、私もその、今、勤
めてる広告の会社は大企業とかじゃ
なくてホントに小さな広告会社で。
ホントに、このまんまのペースで続
けていけるのかな？ っていうのは少
し考えることもある

あかり：なんか。あれ？ キャリアアッ
プとかあんの？

芙 美：うーん。結構ね、安全な道を
行きたいっていうのはあるのね(笑
う)

あかり：(笑って) あー、そうなんやあ

芙 美：うん。だから、小さな会社と
はいえやっぱりこう、ある程度、そ

こで10年もいて。で、あの小さい会
社ながらその役職もついたりとか
すると、自分の裁量で、ある程度、
決めさせてもらえることとかも増え
てはくるよね。でも、逆に言うとその、
ダメだししてくれる人もいなくな
るっていうか

あかり：せやね

芙 美：うん。やっぱりこう、なんて
言うんだろなあ。よくも悪くも、回
りに対してこう、偉い人の顔が(笑っ
て)出来るっていうか、なんかそれも
ね、嬉しいような複雑なような気が
したりはするかなあ

あかり：(笑っている)

芙 美：いや、私あかりにこんなこと
聞いちゃっていいかなあと思ったん
だけど

あかり：(笑って) あかん

芙 美：(笑って) 聞いちゃってもいい？

あかり：うん、はいはい

芙 美：(笑う) あ。ね

あかり：(笑って) コワッ

芙 美：(笑う) もうね。随分になると
は思うんだけど、普段あかりが自分
から話してくれるから、聞いちゃっ
ていいのかなって思うんだけど、離
婚、あったじゃない？

あかり：うんうん

芙 美：その時はまあ、もうホントに、
あかりは経済的にも自立してるし。
でも、あの、別れようってなった時
にそんなに、躊躇もなくパッと別れ
たって言ってて。離婚ってのを経験
してその後にもまた、職場で、看護師
をやっていくっていうことのなんか
こう、心のありようって変わったの
かなあと

あかり：うーん、なんか。そうねえ。
外見(そとみ)あんま変わってない
と思うけど、やっぱりそれなりのダメ
ージは受けてるので。なんか…うーん、

あんまり、わあ、私は一人で生きて
いくぞ、っていうふうにもなれんかっ
たけど。でも、もう一人になってし
まったから、あ、なんとかせなっ
ていうのがあって。大して変わってな
いんだけど、なんか、職場では、その、
あんまり自分がこう、例えば離婚を
機に、わたし仕事頑張りまーす!と
かっていうふうになってるようには
見せないでおこうって思ってた
芙 美：うーん。じゃ、たとえば、も
うあの、独身に戻ったから、例えば
夜勤とかで今日入る人が難しそう
だったら私行きますよ、みたいな
あかり：せやねん。こうゆうとこにく
んねん、しわ寄せが!

芙 美：(笑う)

あかり：で。こう、そういう空気にな
るわけよ。あ、槇野さん。(笑う) あ、
槇野さん、みたいな、感じになって。
あ、あたしか、やっぱりなっている
のはあんねんけど。あんねんけど!

芙 美：(笑っている)

あかり：(笑う) いや、最初はちょっと
そういうのも受け入れててんけど
やっぱり、最近はいや、ちゃうと思っ
て。あ、まあ、もちろん、そういう
家庭がある人とか、子供さんがいて
はるひとは、あの一、もちろんそう
いうとこは配慮されるべきやと思う
ねんけど、やっぱり私がミスしたら、
どうしょうもないっていうか、こっ
ちが、なんか疲れてますっていうこ
とは絶対言えないし。まあ、疲れた
顔も出来ないっていう現場だから。
うーん。あの、休みますって言う

芙 美：うん

あかり：夜勤、なんか、若いコいいひ
んの、みたいな(笑う) 結構、そうい
う意味ではなんか、すごい強くなっ
たかも(笑う)

芙 美：うん。やっぱり離婚を経験し

て強くなったなって思うんだ、思う
んだよね。ってことなの？

あかり：いやー

芙 美：そうでもない？

あかり：どうかなあー。どうかなー、
ま、一人でいかなあかんって、うー
ん…いや、そうか、逆に自信がなくな
ったかも

芙 美：あー

あかり：うん。なんか、まあまあ結構、
さっぱり別れたし、その後も全然連
絡とかも来たりするから。彼に対し
ては別に、なんかしゃあないなっ
ていうのがあるんやけど、でもやっぱ
り、女としてというか人間としてやっ
ぱり、やっぱり自信なくすよ

芙 美：うーん

あかり：(笑う) うーん、なんか

芙 美：でもね。ホント、それ、それが
ホント正直なアレかもしれないよね

あかり：どう？ どう？ 芙美は、結婚、
生活(笑う)

芙 美：結婚生活はねえ(笑う)

あかり：まあ、仕事との両立を。私の
中ではメッチャ上手くやってるよ
なって思うけど

芙 美：いやー、それがあんまり上手
くいってない(笑う)

あかり：え、どっちが？

芙 美：いや、でもなんかホントね。
他人、他人っていう言い方はないか
も知れないんだけど。たとえそれが
友達だったとしても、人に言うって
ことを全然、あたししなかったんだ
けれども。うーん、なんか。ここま
でなんか遡っちゃうとアレなんだけ
ど。なんで結婚、したんだろうって
思うぐらい、ちょっと今なんか混沌
と、しちゃっていて

あかり：え？

芙 美：なんかあまり上手いかわなく
なっちゃってきてるところがあるな

あっていうのは

あかり：うーん。アレじゃない？ 子供、
子供は？ 子供

芙 美：子供はねえ

あかり：うん

芙 美：うーん。なんかねえ、子供、は、
お互いまあ、いてもいいし

あかり：(笑う)

芙 美：まあ、いたほうがきっと ―
いたほうがっていうか、欲しいか欲
しくないかっていうときと欲しい
んだろうと思うんだけど、ただそれ
以前に、ちゃんと2人が心通じてな
いの突然子供だけをそこに、なん
か、存在させることに、うーん。わ
たしも、拓也もたぶん、怖さを、感
じているんだと

あかり：ふーん

芙 美：うーん。結局、失敗したくな
いものもあるのかもしれない

あかり：ふーん

芙 美：なんかこう、やっぱり出来る
ヤツだよね、っていうのをやっぱり、
ある程度はやっぱり目指してて、そ
うなりたかった、んだと思う。過去は。
ところが

あかり：今は？

芙 美：今なんか、それ…私か、みた
いな、なんかそういう部分もこう出
てきちゃったんじゃないかなあって
いうのが。この鎧はどうやって着
ちゃったんだろうって、で、着ちゃっ
てその脱ぎ方はどうやって脱ぐん
だったっけ？ っていう感じの戸惑い
みたいなものもあるから。でもき
つと、そういうわたしを、なんかこう、
拓也は見て居心地の悪さみたいなも
のをやっぱり感じていたんではない
かなあ

あかり：居心地の悪さか

芙 美：うん。あかりは

あかり：うん

芙 美：え？ いつも、あかりが普段
言ってるから言っちゃっていいんだ
と思うんだけど、旦那さんが浮気し
ちゃったのが、原因だったんでしょ？

あかり：うんうん

芙 美：離婚した時に泣くとか、そう
いうなにか、ものすごくわかりやす
い ―

あかり：情けなくなって泣くのはあっ
たかなあ、なんか、まあ悲しい。でも、
なんかさ、ここで泣かなくなって思うね
んけどさ、涙出てこうへんねんよな。
ここで泣けよ、ってすごい思うね
んけど、その時に、その冷静な自分
が修羅場とかやったりとかすると。
でもなんか全然出てこうへん、む
しろ渴いていくみたいな。

芙 美：うーん

あかり：でもなんか、どう芙美は？ 結
構、なんていうの。武器として使っ
たりしたことはないの？

芙 美：わたしね、武器として泣くっ
ていうことを使うっていうことが、
正直なかったんじゃないかと思う。
そういう意味で、むしろその泣く、
泣かずに負けずに、仕事を頑張るわ
たしっていう、ことのほうを大事に
してたのかも知れない

あかり：ほう

芙 美：うん。でも…ワザと、ワザと
泣くっていうことじゃないけれども、
今度本当に拓也と話す、あの、時間
とか機会が持てたとしたら、その時
にホントに自然に涙が出るんだっ
たらその時は、ちゃんと泣こうと

あかり：ああ我慢しない

芙 美：うん。っていうことは思った、
それはワザと泣き落とそうとかいう
ことではなくって、自然とそのとき
に。うん、あれば。泣こうかな、っ
て思うかな。うん。

あかり：(頷く)

COLUMN	
スタッフの制作ノートから	
松本 ひとみ（デザイン・クリエイティブセンター神戸）	
極力さとられないようにできる限りの忍び足で「キャラクター・インタビュー」の撮影部屋に入る。	忍び足で入った長い講義室の隅に、KIITOにもとからある物々——欠損部品のあるスタンドライト、倉庫に眠っていたハログンランプ、事務所から借り出した椅子——などを組み合わせた即席のスタジオが出現していた。撮影用ライトが私に背を向けて、調光用の衝立が並び、複数台のカメラと2人1組の出演者（ワークショップ参加者）、そして濱口さん率いる撮影チームが談笑しているらしいことが隙間から見える。準備が始まったところらしく出演者がリラックスできるように濱口さんたちは話題を振り、居心地よい状況をととのえていった。そこに居てもいいのだ、話してもいいのだ、という空気を準備するというのだろうか。それは身体を触る、あるいは治療に関わる職業のふるまいを思わせるような「もてなし」であった。プライベートな関係性のなかで、心の機微を順番にまでていく、秘密裏に進められる行為のようであったので、その場にいるのが気恥ずかしいような、見てはいけないものを見てしまったような気持ちにさせられた。と同時に、そこで交わされる言葉が広めの天井と長い空間を伝ってわずかな増幅を伴い、私のもとまで響き届けられるのは、とても幸運なことであった。そこには聞く者を包み込むような声が満ちていたのだ。思えば、この場に起こっている信頼関係こそは、ワークショップで積み重ねてきたことのひとつの到達点であった。
撮影に入るまでに幾度と無く開催してきたワークショップは、最初からすべてのカリキュラムが綿密に組み立てられていたわけではなかった。開講することになったことや参加者の反応を見て、次以降のカリキュラムが再検討され、組み立てられるといった具合で、常に形を変えていた。その延長線上にある成果発表についても、着地点を定めるまでに濱口さんたち制作チームと何度も議論を重ねた。その過程で、彼らと私たち KIITO の協働関係も築かれていった。	
しかし、制作がまさに進められる撮影現場となると、また話は別であった。東北記録映画三部作の製作時に、撮影する相手のもとへ何度も通うことで信頼関係を築き、「カメラに向かって話す」のではなく「この人の前にカメラがある」と思ってもらえるようになり、「撮っても大丈夫だ」と感じた時に初めてカメラを回したと聞いていたからだ。関係性の外にいる人物が撮影現場に立ち会えるとは思えなかった。それでも私がおずおずと、立ち会ってもいいかと尋ねると、濱口さんは少し迷って、考えてから「出演者の気にならない位置からであれば…」と言った。	

COLUMN	
成果発表当日。あの場で起こったことがカメラに収められ、編集の手を経て提示された。当然のことかも知れないが、そこでは濱口さんたち、カメラの向こうにいる人たちの存在は無いものとされている（そして、カメラそのもののさえも）。向い合って座った2人の出演者が「あなたは誰ですか」という問いかけから始め、時には笑いあい、時には惑いながらも質問を投げかけ合う様子を目にするのは、たんなる一方向的な鑑賞経験とは言いがたい。日常生活で友人同士の話を聞いている時と同じように、この人物の人間性にまさに触れている、という奇妙な感覚にとらわれるのだ。また、映像という形で切り取られ構成されることによって、人が人の名前を呼び、語りかける声の魅力や、一人ひとりの声や顔の造形のあまりの違い（もちろん美醜とは別の次元である）が研ぎ澄まされて見えたのだった。	揺らぎながらその場に身を置いていたように思う。同じシナリオを読んでも二度として同じ「本読み」にはならない。しかしその中で、心に留め置きたくなるような「いい声」や「いい姿」にふと、出会ったのだ。
	濱口さんは「人は誰でも、驚くべき表現力を持っている」と言う。その確信は、もちろん彼自身の経験に裏付けられてもいるのだろう。しかし、人に対する肯定とあくなき興味を持ち続け、関係を深化させてゆく、そのような世界に対する態度が今回の一連の取り組みに表れている。
	ワークショップのカリキュラムを決める時も、成果発表の制作を行う時も、いまがどのような状況かを踏まえて、優しく、即興的に、それでいて周到に、次の行動が組みたてられる。すべて周囲に、人に、聞いている。どうやら信じられそうだと思う方向に舵を取り、「自分の予想を超えるなにか」が起こることを求めている。
いっぽう「公開本読み」では出演者たちと観客の身体が会する場となった。演技経験をもたない出演者が一定数を占め、全通して3時間以上にもわたる中、声の調子や大きさは必ずしも安定していない。直前に発言した人の声の調子やリズムに影響されて、次の人の発言がなされていくことによって、そこには「場の流れ」のようなものが生成されていた。出演者たちは、周囲の状況にどの程度影響され、自分自身のコントロールをどのように保つべきなのか、つねに	そして何よりも、沢山の「俳優たち」をカメラの前に立たせ、「いい声」「いい姿」を引き受けさせる存在にしてゆくことができる。この点において濱口竜介は紛れもない映画監督であるのだ。

濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe



前章の成果発表の前段階として、
2013年9月より約5ヶ月間に渡り
「濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe」を行なった。
一般公募を行ない、選考を経て選ばれた17人が参加。
カリキュラムは基本的に毎週土曜日行なわれ、
「聞く」を大きな柱として、
「演じる」ということを様々なワークを通して積み上げてきた。
その全貌をここに記録する。

文＝濱口 竜介

第1回 9.14 土

オリエンテーション
自己紹介その1／「声」についての講義

自己紹介を兼ねた簡単なインタビューゲームを行なう。円になって、時計回りに聞き手・語り手を担当しながら、インタビューをして行く。ルールは答える際に「一つだけ『嘘』を交えること」。全参加者が揃っていないこともあり、半数だけ自己紹介を済ませた。その後、ワークショップ全体が目指す方向性として、濱口が「声」についての講義を行なった。酒井耕と共同監督した東日本大震災被災者へのインタビュー映画『なみのこえ』制作時の体験を踏まえた講義。以下、講義原稿からの抜粋。

「不思議だったのは2人の間でインタビュー撮影の振り返りをすると、『良い』と思える瞬間が一致していたことです。何が良かったのか。とてもクリアな、混じり気のない声をしている、という気がする。その声はいったいどこからやって来るのか、どのようにして現れるのかを2人して考えるようになりました。

人が他人に話せる話題はレイヤーが分けられています。社交辞令から成るような一番浅いレイヤーから始まり、深層に行けば行くほど話せる人を選ぶ話題、つまり秘密に近くなります。最深層には、誰とも分け合うことのできない、ほとんどその人自身であるような『秘密』が存在するように思います。『なみのこえ』のインタビューをしていて、時折聞くことがあったような気がした声というのは、何だかこの辺りから発されているような気がします。実際に話題にされていること、言葉にされていることは他愛ないことだけど、その人自身の声であることを疑わせないような、とてもクリアな濁りのない声が、現れることがある。

こういう声が何で出てくるんだろうかと酒井と話したときに、非常に当たり前のことを確認しました。それは、僕たちが『聞いている』からこの声は現れて来るんだ、ということです。僕たちがどんな人間であるか、ということはそれほど関係なく、『聞かれている』『話してもいいんだ』という実感を向こうが持ったときに、こうした声はスッと現れてくるんだという感覚を持ちました」



第2回 9.21 土

自己紹介その2／ダイアログ・カフェ

オリエンテーションの続きとして、残り半数の自己紹介から始める。趣向を変えて、それぞれ自分の子ども時代の写真を持参し、スクリーンに投影。写真を見た参加者のインタビューを受けながら、それぞれの来歴を語る。誰もが、今とはまったく姿形の違う「子ども」であったというごく当たり前の事実を確認する。ワークショップカリキュラムの一環として行なわれる公開インタビュー「ダイアログ・カフェ」の第1回を行なった。ゲストはみやぎ民話の会・顧問を務める小野和子さん。この日同時上映を行なった、東北の民話語りを記録した映画『うたうひと』にも出演しており、上映後のトークは濱口がメインの聞き手となって進行した。40年以上、民話の聞き手として語り手と向かい合ってきた小野さんに「聞くこと」とは何かを問う。参加者の質問にも答えながら、「聞くこと」はそれまでの自分を捨て去ることだと小野さんは語る。



第3回 9.29 日

砂連尾理さんによる身体表現講座#1／
ダイアログ・カフェ打ち合わせ

ダンサー／振付家である砂連尾理さんをゲスト講師に招いての「身体表現講座」第1回(全5回予定)。身体表現の経験がない受講生も多くいる中で、「身体で」「聞く」ことを探究して行く。

長めのストレッチで体をほぐした後に、互いのパーソナル・スペースに踏み込むワークを行なう。耳と耳、まつげとまつげなど自分の身体の一部を触れ合わせ、「他人」同士ではなかなか成立しない距離に入っていく。会話を重ねることとはまた異なる、身体を通じての率直なコミュニケーションを目指す。その後、参加者が主体となって行なう今後のダイアログ・カフェに関して、3つの班に分かれて話し合いを行なう。どんな人を呼びたいか、どんな話を聞きたいか。12、1、2月に各班でゲストを呼ぶことが決まる。

第4回 10.5 土 - 11 金

フィールドワーク「いい声を撮りに行く」

各自が、「自分が興味のある人」のところへ赴いて、その人にインタビューを行なう。しかし課題は、インタビュー内容そのものではなく「いい声」を「撮る」こと。東は横須賀から西は姫路まで、インタビュアーに加えて、それ以外の有志が「観客」として、ワークショップのスタッフが撮影担当として同行した。インタビューは毎回約2時間に及び、その都度、インタビュー内容を振り返るフィードバックも現地で行なった。この時間帯に「いい声」が出ていた、という認識はその場にいたもの全員、不思議なほど一致していた。

第5回 10.19 土

「いい声」プレゼンテーション

前回のフィールドワークで撮ってきたインタビュー映像の中から約5分程度「いい声で話をしている」と思われる時間を各自抜粋し、上映をしてそのときのシ

チュエーションを語る。「なぜいい声と思ったか」「どのようにしてその声を発するに至ったか」がプレゼンテーションされた。響きに「ウソなく」「本当のことを言って」と感じられる瞬間が「いい声」として選ばれる傾向があった。声に、極めて率直に心情が反映されることに一同、驚かされる。



第6回 10.26 土

砂連尾理さんによる身体表現講座#2

身体表現の特別講師として砂連尾理さんを迎えた第2回。「距離と越境」をテーマとして、互いの関節を曲げ合って「痛み」の発生するギリギリを見極めるワーク、見つめ合いながら互いにとって適正な「距離」を見つけるワークを行なう。仕上げとしてピナ・バウシュ作品『コンタクトホーフ』の中から「多数の男性が女性を触る、つかむ、持ち上げる」一場面を模倣した。同性や性別逆転のパターンでも再現し、日常のコミュニケーションでは起こらないような身体的接触へと踏み込んで行く。



第7回 11.2 土

「偶然写真」プレゼンテーション

この月から月間テーマを据える。11月のテーマは「偶然」。この週の課題は、「偶然／もしくはその痕跡を写真に撮って来る」こと。自分の生活に訪れた偶然の瞬間を写真に収めること。偶然が起きたその痕跡の写真でも構わない。それぞれが、写真をスクリーンに投影し、その週に自分が出会った「偶然」についてプレゼンテーションする。それぞれの「偶然」観が語られ、偶然の定義が激しく揺れる。あらゆるものが偶然に見えて来る。また、偶然の写真はこの月通じての課題となる。毎日撮影し、月末の身体表現講座の際にそれらを連ねて、各自の「偶然のダンス」を発表する。

第8回 11.9 土

インタビューゲーム「3つの偶然」

3週に渡る「短編映画撮影プロジェクト」の第1週。ワークショップ参加者を男女2人ずつの5班に分ける（人数合わせのためにスタッフも参加）。班の中で、男女がペアを作り「今の自分を形成した3つの偶然」についてインタビューし合う。3つの偶然のうち1つは、自分が生まれる前に起きた偶然でなくてはならず、参加者は必然的に自分自身のルーツを調べて、約2時間のゲームに臨むことになる。このインタビューの様子は撮影記録され、カメラ・ポジションは濱口の監督した「東北記録映画三部作」を踏襲した。各ペアは、それぞれに向けられたカメラを真正面に見据えながら会話し合う（Z形式と呼ばれる：写真参照）。撮影は各班のもう一方のペアが担当した。男は男を、女は女を撮る。後日、撮影者は被撮影者を演じることになるため、この日撮影された映像素材は、演者の資料として配布された。



第9回 11.16 土

演技のための取材「デート」

参加者はこの翌週の「短編映画撮影」において、インタビューゲームで自分が撮影した相手（男は男、女は女）を即興的に演じる。そのために、各自が演じる対象を取材する時間を設けた。前週のフィードバックも兼ねて、「3つの偶然」以外の来歴をお互いにインタビューし合う。聞くのは自分たちの聞き易い場で構わず、KIITOを出て喫茶店や水族館、ショッピングなどでの、さながら「デート」とよく似た取材となった。取材終了後は、翌週のための演技リハーサル及び、フィードバックを行なった。単なる物真似で終わらない演技を目指す。



第10回 11.23 土

第11回 11.24 日

短編映画撮影

11/9(土)にインタビューし合った各ペアが、今度はまったくの他人(各班の同性キャラクター)を演じながら、「3つの偶然」を90分に渡ってインタビューし直す。自分と同じ年代を演じるとは限らず、中には20代で60代を演じる人も。自分たちが撮影したペア

の完全コピーを図るペアや、まったく逸脱して即興的に演じるペアなど、それぞれの特色が出た。ワークショップの大半を占める演技未経験者にとっては初めて「演じる」機会ともなった。このときの撮影はスタッフが担当し、カメラ・ポジションは前回同様「東北記録映画三部作」を踏襲した。



第12回 11.30 土

ダイアログ・カフェ Vol.2／砂連尾理さんによる身体表現講座#3

午前中は翻訳家の柴田元幸さんを迎えてのダイアログ・カフェ「翻訳の聞く(イン)、演じる(アウト)」。柴田さん自身が翻訳されたブライアン・エヴンソンの短編朗読から始まり、「翻訳する身体」について何う(聞き手はスタッフの脚本家・高橋知由)。柴田さんが語る原文と訳文の関係―「テキストの声を聞き取ること」に、演技におけるキャラクターと演者のアナロジーを見る。午後は、砂連尾理さんを講師に迎えての身体表現講座

第3回。「呼吸を合わせる」ことをテーマにワークを行なう。ペアを作り、相手を見つめながらの視覚的な模倣に始まり、逸脱して行く。単に視覚的にではなく「呼吸を相手に合わせる」とはどういうことかを探る。ラストは各自、この月に自分が出会った偶然をテーマにした「偶然のダンス」を発表し、11月を締めくくった。12月のテーマは「書き言葉」とであると発表される。



第13回 12.7 土

短編映画撮影フィードバック 書き起こし／本読み

11月の「短編映画撮影」のフィードバックを班毎に行なう。各班の男女ペアがもう一方のペアの記録映像(自分たちを演じた映像)を確認し、「何が／なぜ起きているのか」インタビューしたい箇所の会話を書き起こした上で、聞き合う。「事前の取材でどこまで聞けたかが、演じる際の自由さにも反映された」「演じる対象がいることが、やり易くもあり、やりづらくもあった」など意見が出る。最大限演じる対象を尊重しつつ、自由に演じることの必要性和難しさに突き当たる。最終的には各ペアの映像素材から、「何かが、ほんとうに起きている」と感じられる5分程度の抜粋箇所を選ぶ。短編映画はこの抜粋の集成から作られる予定。後半は、書き起こし原稿の中から、最終的に選ばれた箇所を2人1組で「本読み」をする。本読みの方法は「1、電話帳を読むように感情なく、抑揚なく読む。

2、読点は一拍、句点は二拍空ける。3、句点毎に読み手を交替する。4、感情がもし入って来たら、拒まない。」無感情／抑揚な読み上げにより、却って言葉の存在感が浮かび上がる。スタッフの高橋は「こんなに研ぎすまされた言葉は書こうと思っても書けない」と驚く。



第14回 12.14 土

ラブレターを書く／読む

参加者が「ラブレターを書きたい人」に手紙を書く。具体的な宛先があること、投函を念頭に置くことだけを条件に、「ラブ」の定義は任される。参加者はKIITOを出て喫茶店など各自が書き易い場所で手紙を書く。

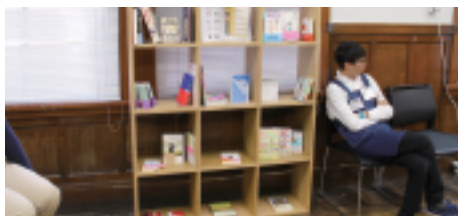
後半はそのラブレターをテキストに本読みをする。使用する手紙は原本ではなく、宛先などの固有名詞が黒塗りされたコピー。差出人不明の手紙をくじのように選び、2人1組で読み上げる。本読みのルールは前回と同じだが、更に「1、先に読む人がリーダー。2、フォロワーはリーダーのスピードに従う。3、できる限りゆっくり読む。4、まるで1人が読んでいるような状態を目指す」という注意事項が加わる。フィードバックで、ラブレターを書く行為について「自分にヤスリをかけていく作業だった」という感想が出る。決して日常には現れ出ない感情の（無感情な）表出に、静かな驚きを感じる。



第15回 12.21 土

ダイアログ・カフェ Vol.3

ブックディレクターの幅允孝さんを迎えての第3回ダイアログ・カフェ「本と『聞く』こと 本との出会い」。ワークショップ参加者が企画した初めてのダイアログ・カフェで、メインの聞き手も参加者が務めた。場に合わせた本棚を作るために選書をする幅さんのお仕事を伺う。情報が溢れた社会の中で、改めて「本」というモノに接することの身体的な楽しさが語られる。参加者各人が「好きな本」を90秒でプレゼンする機会も設けられ、一冊一冊の本自体が、人とひとの行きかう結節点であることが明らかになって行く。



第16回 12.22 日

砂連尾理さんによる身体表現講座 #4

前回の「呼吸を合わせる」を発展させて、砂連尾理さ

第18回 1.18 土

ダイアログ・カフェ Vol.4 / ディスカッション

参加者が企画するダイアログ・カフェの第2弾。「音遊びの会」を迎え、知的障がい者と健常者のミュージシャンやダンサー、保護者との即興的な音のコラボレーションが展開される。聞き合い、呼応する中で、ある音を発することが、その前の音を肯定していく。演奏の最後は、来場者はほぼすべてが参加するビッグバンドによる即興演奏が行なわれた。誰もが「個」でありつつ、即応し、一つの場を作り上げる「音遊びの会」の姿が、このワークショップの目指す姿とも重なる。その後、成果発表に向けて、再度のディスカッション。『めまい』を改稿した『BRIDES (花嫁たち)』を映画制作のためのシナリオとしてスタッフが提示する。成果発表として、『BRIDES (仮)』の公開「本読み」と「キャラクター・インタビュー」が決定される。



第19回 1.19 日

砂連尾理さんによる身体表現講座 #5

成果発表が「本読み」と「キャラクター・インタビュー」に決定したことを承けて、リラックスして、身体の可能性を各人が自覚し広げられるようにワークを行なった。列となって円を描くように「歩く」ワーク。ペースは崩してもいいし、前の人を追い抜いてもいいが、ひたすら歩かなくてはならない。2組に分かれ、1組はもう1組の歩く様を「観る」。歩く側にいると必ずしもわからないが、観る側にいると、各人が互いに影響を受け合っているのがわかる。自分の意志で歩いているように思えても、必ずしもそうではない。最後のワークは「沈黙の会話」。2人1組で向かい合い、「動かず」「話さず」それでも会話ををする。参加者たち

んが普段からやっているような「距離の即興」を行なう。2人ペアとなり呼応しながらお互いが「ヒリヒリできる」距離を模索する。ワーク自体は3人1組となって、各ペアの3分の即興をもう1人が観察し、その都度フィードバックを行なう。その「観察者」を更に外側からカメラで撮影することによって、集中状態の渦巻がその場に現れる。前回の講座で課題として出されていたロベール・ブレッソン監督『ラルジャン』の抜粋(1分程度、2箇所)の動作・台詞を再現する。映像を完全再現することの不可能さと、脚本のト書きをそのまま動作化したようなブレッソンの「書き言葉」的身体が浮かび上がる。



第17回 1.11 土

脚本選定

年末年始に“はたのこうぼう”＊が書き上げた3つのシナリオ『めまい』『チャンス』『VOICE』の中から、参加者がディスカッションを経て、2月より撮影する映画のシナリオを選定する。

シナリオはそれぞれ、ワークショップのこれまでの経緯を踏まえて書かれたもので、「社会システムの中で、自身に率直であること」をテーマとする3本の中から、選定作業を行なった。結果的に『めまい』『チャンス』の2本に絞り、次週以降の選定となった。

＊映画監督の濱口竜介、野原位、脚本家の高橋知由が神戸で結成した脚本ユニット。



は戸惑いを隠さず、フィードバックでも「よくわからなかった」という意見が出た。それでも、黙っていることは必ずしも「沈黙」ではないことは共有された。わたしたちの身体は普段、随分しゃべっているらしい。沈黙の中にも表現があり、おしゃべりもいれば聞き上手もいて、一段深いコミュニケーションがある。砂連尾さんは参加者の様子を見ながら、ワークショップ全体を通じて「全員の、存在が分厚くなった」と濱口に告げた。



第20回 1.25 土

通し本読み／フィードバック

成果発表を控えて、初めて脚本『BRIDES (仮)』の通し本読みを行なった。本読みのルールは、これまでのインタビューの書き起こしやラブレターを読んだときと基本的には変わらない。異なることは各人が自分の役柄の台詞を担当し、劇中に台詞のない登場人物(「女」)がト書きを読むこと。

休憩を入れて、約3時間半、非常に繊細に、互いに聴き合いながら通しの本読みが為された。本読み後、班に別れてフィードバックがされた。本読みをしていて「いい時間帯」にはとても心地よく聞ける音の連なりがあったという意見、何よりキャストの声を得て、初めてシナリオ中の登場人物たちに「命が吹き込まれた」という意見があった。しかし、一方で必ずしも観客に届けるための本読みとは言えず、声量の小ささを発表当日までにどうするか、観客をどのような存在として捉えるか、という課題は残った。

第21回 2.1 土

声のエクササイズ／向かい合い本読み

前回を承けて、「声を届ける」ワークを中心に行なった。

エクササイズとして、1人が背を向けているもう1人の名を呼ぶ。名前を呼ばれた人は、自分が「ほんとうに呼ばれた」と感じたときにだけ振り返る。やってみると、声は意外なほど見当違いな方向に飛んでいることがわかり、それを受け止めることが「聞く」ことの困難さとして、普段からあることにも気づかされる。相手が振り向く(届く)声と声量のあいだに決定的な関係はなかった。

この週の本読みは、2列に別れ、互いに向かい合う形で途中まで行なった。声を向かいの相手に届けることが目標となる。しかし、声量が大きくなっても、初回にあったような繊細な声の受け渡しは失われた。各人が声を出すことに集中し過ぎて、聞けていない。「聞いて」「声を出す」ことが次の課題となる。フィードバックも兼ねて、役柄の関係が近い者たちが班となってキャラクターのリアリティや性格・心情についてディスカッションする。各キャストには、脚本以外にも役柄の来歴が語られたサブテキストが事前に配られており、それをもとに役柄へのアプローチを図る。最後には次週に控えた「キャラクター・インタビュー」の撮影の準備として、役柄としての「沈黙の会話」を行なった。正解はない。ただ、各々が「別人」となることのほのかな感触を得た。自分の中の他者に聞くこと。その他者を尊重すること。



2.6 木、7 金、9 日、10 月、11 火

「キャラクター・インタビュー」撮影

ワークショップの合間を縫って、各参加者が脚本『BRIDES (仮)』中の登場人物を演じながら、相互にインタビューしあう「キャラクター・インタビュー」の撮影が計5日間行なわれた。17人の参加者にスタッフ1名を加えた計18人がそれぞれペアを組み、計9組が互いに向かい合い、時にカメラを向き、撮影に

臨んだ。

各ペアは脚本の中で元々関わりのあるキャラクターであることも、初対面であることもある。互いに聞き合う中で生まれる会話は、「こんなにも自然に、かつ真摯に、カメラの前で話し合う人たちを取めた映像を他に知らない」とスタッフたちを大いに驚かせるものだった。ともすれば会話は単なる「おしゃべり」にしか聞こえないものであるが、それは紛れもなく「演じられた」ものでもあり、5ヶ月間のワークショップの成果と呼ぶに相応しいものだった。各撮影は90〜120分程度で、最終的には撮影素材は各組10分程度に編集され、2/15に展示された。



第22回 2.8 土

本読み最終仕上げ

成果発表のため、「キャラクター・インタビュー」の撮影が別日に同時進行する中、「本読み」の最終仕上げを行なった。

エクササイズとして、円になって座って、本読みを行なった。役柄は関係なく、句点ごとに順々に、人を替えて読み上げて行く。明示されたルールは「前の人の影響を受けること」。前回の課題を承けての「聞いて」「声を出す」ためのエクササイズだ。中心でそれを聞く濱口には、とても心地よい音の連なりが聞こえる。

その後、本番の布陣となる最後の通し本読みを行なう。3時間半の本読みの中に、いい時間帯もあれば、良さを保てない時間帯もある。読み上げる際の理想的なペースや声量を保つことと、人の影響を受けるのは、いったいどちらが大事なのか、と質問が出る。読むのが速くなったり、声が小さくなっても、人から影響を受けることを優先すべきなのか。濱口は30人31脚を例に話をする。「一番遅い人に合わせた時

に、集団としては一番スピードが出る。そうしないと転んでしまう」それは弱さや小ささ、遅さを肯定することと似ている。そうでしか、起こらないことがある。



第23回 2.23 日

ダイアログ・カフェ Vol.5

参加者が企画するダイアログ・カフェの第3弾。女優の渡辺真起子さんを迎えて、主に『M/OTHER』における「即興演技」を中心に話を伺った。

前半は、成果発表を終えたばかりのワークショップ全体のフィードバックとして、「キャラクター・インタビュー」の映像を見ながら感想を話し合った。また、参加者が考案した「言葉の神経衰弱」という企画を行った。言葉のカードを参加者が選び、真起子さんと同じ言葉を選んだ参加者と真起子さんがフリートークをするものだ。「語る」「会話する」「聞く」など、テーマや相手によって表情を変える真起子さんの魅力に一同、魅了される。

後半では、『M/OTHER』における即興演技のあり方へと話が進む。「即興」で演じたいという欲望や、それに伴う恐怖が率直に語られることで、「即興演技」と「生きること」の境が曖昧になって行く。「演じることと生きることはどう違うのか?」これから映画製作に向かうワークショップ参加者にとって、大きな問いが呈示されてワークショップは終わった。



2013年9月から2014年2月まで、デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) のアーティスト・イン・レジデンスプログラムとして開催された「濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe」は、おそらくは、演技のワークショップとしてはとても奇妙なワークショップだ。この冊子をご覧いただければ分かる通り、5ヶ月に渡るワークショップ期間中、ほとんど演技のレッスンらしいレッスンを行なわなかった。

では一体何をしていたかと言うと、週に1回、土曜日にKIITOに集まって、自分たちが撮って来たインタビューを見て話したり、またはお互いにインタビューをしたり、ディスカッションをしたりしていた。身体を動かしたりもしていたが、それも含めて、ずっとやっていたのは、ある種の「おしゃべり」だった、という気がしている。

この奇妙な演技ワークショップはおそらくは監督ジョン・カサヴェテスの言葉と僕自身の個人的な経験に導かれるようにして始まった。ジョン・カサヴェテスの発言を引用する。

「私はどんな人にもいい演技をさせられるという自信がある。というのも自分の持っている何かを表現したり、人とやり取りをしたりすることが演技だと考えているからだ。」

どんな人でも必ずいい演技ができる。この場合、カサヴェテスがなぜそう考えるかと言えば、そもそもの自分自身を率直に表現するというのが、即ちいい演技だからだ。同意しよう。では、その裏返しとして、「実際はなぜ、誰しもがいい演技をするわけではないのか」という疑問が頭をもたげて来る。単純に考えるなら、それは自分自身を率直に表現することを阻害するような幾つかの要因があるからだ。それは例えば、表情までも含めた身体の可動域の問題かも知れないし、「こんなことをするのは恥ずかしいことだ」という社会的規範の問題かも知れないし（「演技」とはそうした規範から逸脱する方法だが、それを完全に為すわけではない。演技空間もまた一つの社会だからだ）、もし

かしたら自分自身を表現するに値しない存在と思い込んでいるからかも知れない。

演技経験不問で参加を募ったこのワークショップにおいて、いわゆる演技や身体操作の技術は必要とされたものではなかったし、それを追求めることもしなかった。このワークショップを僕自身は例えば、普段の演技がそうであるように「話す」ことや「動く」ことのレッスンとは考えなかった。「即興演技ワークショップ in Kobe」はあくまで「聞く」ワークショップとして構想された。「話す」ことや「動く」ことはあくまで「聞く」ことに導かれて起こる。単なる「おしゃべり」のようにも見えるワークの数々は「互いに聞き合う」このワークショップの当然の帰結だったと言える。

ワークショップをそのように構想したのは、東日本大震災を経た東北沿岸部に住まう人たちにインタビューを行なった経験に由来している。それは『なみのおと』『なみのこえ』という映画にまとめられている（共同監督は酒井耕）。このときインタビューーは即ち、津波の被害を受けた方たちであって、彼らは大手メディア、もしくは「被災地」の外の人間が求めるように「被災者」然として振る舞うことにどこか慣れていた。ただ僕たちが求めたのは「どう被災したか」ということではなく「いったい誰が」被災したのかということだった。「あなたがいったい誰なのか聞かせてほしい」というのが僕たちのインタビューの態度になった。そうではなくては、「震災」と呼ばれる事態がいかなるものか、想像することがそもそもできないと考えたからだ。その過程で、僕たちは人が「聞かれている」という実感の中で、いかに率直に自分自身を表現するかを知った。ただその実感の中でのみ、と言ってもいい。人が率直に振る舞うには、自分に寄せられている関心を実感する必要がある。それはインタビューであろうと、演技であろうと同じだろうと考えたことが、このワークショップの構想に直接つながっている。

結果として、このワークショップは週に一度、「関心」を持ち寄る場になった。妙な言い方にはなるけれども、参加者17人とスタッフの全員が「関心を週に一

度の習慣にしていた」。それは無理にそう促していたわけではなく、ワークを重ねるうちに段々と、自発的にそう成っていった。「聞く」ことを通じて他者の中に尊重すべき部分を見出す体験は、自分自身の中に同じ部分を発見し、尊重することにもつながって行った。成果発表は結果的にワークショップ終了後に製作予定の映画脚本の「本読み」と、各参加者が、その映画の役柄を演じた「インタビュー映像の展示」となった。そこには、演じることを通じて、とても率直な彼ら自身の現れを見ることができたと思っている。彼らはとても「いい顔」で「いい声」をしていた。見ていて、聞いていて、とても驚かされた。

ただ、「内輪」としてそのように幸福な空間を自足させることが、このワークショップの目的ではない。本来目指されていることは、その空間にカメラを置くことだ。春からワークショップ参加者とともに、映画撮影が始まる。カメラという凝縮された「他者の視線」は人を萎縮させる。その前で率直に振る舞うことを可能にするのは、最終的には各人の勇気によって、でしかない。しかし、もしもそれをするために励ましがあれば、自分の価値を認める人たちの中であれば、それは少し易しくもあるかも知れない。カメラの前で「いい演技」をすること。このワークショップではずっとそのためのレッスンをして来たのだ。つまりは、率直に振る舞うこと。そのための基盤を作ること。もし、カメラの前でそれを為したら、それは「社会の中で個人が率直に生きること」の証拠映像になるのではないか、そう考えている。それは、観る者がそのように生きることを鼓舞するものであり得るかも知れない。

まだ何も終わっていないが、始まっていないわけではない。もしもこれから素晴らしい何かを為すとすれば、それはこのワークショップで過ごした時間のおかげだろう。この機会と場所を与えてくれたKIITOに、スタッフの皆さんにこの場を借りて心より感謝する。

(2014/3/22)



濱口 竜介 映画監督

1978 年、神奈川県生。
2008 年、東京藝術大学大学院映像研究科の修了製作『PASSION』が国内外の映画祭で高い評価を得る。
その後も日韓共同製作『THE DEPTHS』(2010)、東日本大震災の被災者へのインタビューから成る映画『なみのおと』『なみのこえ』、東北地方の民話の記録『うたうひと』(2011～2013 / 共同監督：酒井耕)、4 時間を超える長編『親密さ』(2012) を監督。
精力的に新作を発表し続けている。

フィルモグラフィ

- 『PASSION』(2008 / HD / 115 分)
○サン・セバスチャン国際映画祭、カルロヴィ ヴァリ国際映画祭、東京フィルメックス正式出品
- 『永遠に君を愛す』(2009 / HD / 58 分)
○パリ国際映画祭正式出品
- 『THE DEPTHS』(2010 / HD / 121 分)
○東京フィルメックス正式出品
- 『なみのおと』(2011 / HD / 142 分 / 共同監督：酒井耕)
○ロカルノ国際映画祭正式出品
- 『親密さ』(2012 / HD / 255 分)
- 『なみのこえ 新地町』(2013 / HD / 103 分)
○山形国際ドキュメンタリー映画祭正式出品
- 『なみのこえ 気仙沼』(2013 / HD / 109 分)
○山形国際ドキュメンタリー映画祭正式出品
- 『うたうひと』(2013 / HD / 120 分)
○山形国際ドキュメンタリー映画祭正式出品
- 『不気味なものの肌に触れる』(2013 / HD / 54 分)

KIITO アーティスト・イン・レジデンス 2013
濱口 竜介

[成果発表]

KIITO アーティスト・イン・レジデンス 2013 成果発表
「自分が誰なのか言ってごらん？」
2014 年 2 月 15 日 (土) 11:00 - 20:30

プログラム
『BRIDES (仮)』公開本読み ①13:00 - 15:30、②18:00 - 20:30
キャラクター・インタビュー映像展示 11:00 - 20:30

[ワークショップ]

「濱口竜介 即興演技ワークショップ in Kobe」
2013 年 9 月 14 日 (土) - 2014 年 2 月 23 日 (日) (全 23 回)
参加者 17 名

[イベント]

『なみのこえ 気仙沼』映画上映会 + 濱口竜介 × 本間直樹トークセッション
2013 年 9 月 14 日 (土) 16:00 - 19:30
ゲスト：本間直樹 (哲学者)

『うたうひと』映画上映会 + ダイアログ・カフェ ～小野和子さんを迎えて～
2013 年 9 月 21 日 (土) 14:00 - 18:00
ゲスト：小野和子 (みやぎ民話の会)

ダイアログ・カフェ Vol.2 翻訳の聞く (イン)、演じる (アウト)
2013 年 11 月 30 日 (土) 10:00 - 11:30
ゲスト：柴田元幸 (翻訳家 / 英米文学研究者)

ダイアログ・カフェ Vol.3 本と「聞く」こと 本との「出会い」
2013 年 12 月 21 日 (土) 13:30 - 16:00
ゲスト：幅允孝 (BACH 代表、ブックディレクター)

「音遊びの会」演奏会 + ダイアログ・カフェ Vol.4 音を遊ぶ空間とは何か
2014 年 1 月 18 日 (土) 11:00 - 13:00
ゲスト：音遊びの会

ダイアログ・カフェ Vol.5 声を「聞く」——誰の？ どうやって？
2014 年 2 月 23 日 (日) 15:00 - 17:30
ゲスト：渡辺真起子 (女優)

濱口竜介レクチャー「カメラの前で演じること」
2014 年 3 月 16 日 (日) 14:00 - 18:00
講師：濱口竜介

KIITOアーティスト・イン・レジデンス2013

濱口 竜介

ドキュメントブック

発行 :2014年3月

デザイン:近藤 聡(明後日デザイン制作所)

写真撮影:森本奈津美(p.4, 5, 6, 7, 8, 9, 12)

編集 :松本ひとみ

印刷 :石川特殊特急製本株式会社

制作・発行

KIITO:

デザイン・クリエイティブセンター神戸

〒651-0082 神戸市中央区小野浜町 1-4

Tel. 078-325-2201

<http://kiito.jp/>

本書の無断転写、転載、複製を禁じます。